

六、羅漢穴

浮穴村に入つてからの光景は、さすがに山深く入りこんだ山村といふ感じが一目して分つた。しかもこゝへ入るとから、曇りがちの空は一層曇り、いつか雨が降り出したのだつた。

「弱つたな、うまく降りやめばいいが？」

「大丈夫だよ。今に屹度降りやむぜ。」

松風先生に、秋山書伯は山羊髭をしごきながら答へたが、それは一同の望むところであつた。

路面は奥深く入つたためか、狭く峻しくなつていつたが、それだけに何時何處に崖くづれがあるかも知れず、さうなつては立往生せねばならないので、運轉手の二宮君は気が気でないらしい。そこへ跛の馬車ひきが材木を積んだ馬車を引いて來たので、二宮君は早速彼に、山本旅館まで車がゆくか訊いて見たものだ。

「山本旅館まではいかんよ。こないだ、川之石のトラック來て、おちてからに、何十人がかりで引揚げてやつたよ。」

馬方は、さもにくくしさうに最新式の車を見ながら云ふ。

「だから、この上の四五軒ある人家へ車を預けるがえ。」

「どうも有難う。」

そこで馬車とすれちがつてから、二宮君は山本旅館の弟が川之石の醬油會社の運轉手をしてゐるために來たのだらうと、一同に語つた。

いつか雨もやんで、山間を行く程もなく、四五軒の人家が現れて來たので、そこへ車をとどめ、片側の立派な家の女主人に車を預かつて貰ふことにした。そこでは、度々車を預かると見え、萬事心得たものであつた。

「惜しい事に、今日はあの山から雲が出てをりますから、時々雨が降つて、大野ヶ原の見晴らしが悪いですよ。」

女主人が注意してくれた言葉をあとに、一同は川にそうた山道を、十町ばかり離れてみると云ふ字小屋の山本旅館まで、歩いて行つた。途中、川之石のトラックが落ちたと云ふところを人夫が三四人修繕してゐたが、そこ以外には何處も道の崩れたところなく、これだつたら山本旅館まで車が行けた。

山本旅館は、小さな羅漢橋を渡つた裾の小川にそつたところにあつて、大野ヶ原へは、その橋を渡らず、小川にそつて五十町の山道であつた。いよく大野ヶ原へ登ると云ふので、一同は山本旅館主のお上さんに山の案内人を雇ひにいつて貰ひ、女中からサイダー並に菓子を買ひ入れる。

『簾月さん、この向ふに浮穴があるさうだな。』

僕と簾月氏は、ポロ／＼降り出してゐたのが、又どうにか降りやんだ空を見上げながら話しあふ。この浮穴と云ふのが、現在は羅漢穴と云ひ、そのためにこの小さな橋にまで羅漢橋と名付けたものであらう。そこへ、雨具を着た案内人の古家氏がひよろ長い姿を現し、手には小さな鎌を持ち、黒犬を連れて來た。

『それでは羅漢穴から先に御案内します。』

古家氏が先頭に立ち、そのあとへ僕、松風、簾月、二宮、耕田、秋山がつき、大野ヶ原へ登る道と反對の、今しがた來た道つゞきを歩いてゆく。こゝらあたりは十一月末から雪にとざされ、三月頃までもその儘消えぬと云ふ。それ程の山村の山道は、殆どすべて石灰岩で、山中に露出してゐるものうちには、かなり良質のものもあつた。

柿の大木の多い小徑を彼是十五六町登り、急に杉山の中へ降つて、小川の飛び石を四つ五つこして向ふへ渡ると、三極と薄と灌木が身を没する程に伸びてゐる中を、ものゝ一町も登りつめた。と、そこに三かゝへもあらうかと思はれる桂の大木が二本あり、その向ふの岩穴から冷房装置でもしてあるかのやうな冷たい風が吹き出してゐる。これぞ、我等の目指した羅漢穴であつた。

七、鐘乳石

峻しい小徑から岩石傳ひに漸く登つたために、全身びつしよりと汗を流してゐた我等の一行は、その里俗には風穴と云ふ羅漢穴の前に五分間も立ちつくさないうちに、すつかり汗の引いてゆくを感じた。それが、いつの間にか生温い風にかはり、それも又冷たい風となり、時をきつてぐる／＼かはつて來る。

古家氏によると、この羅漢穴は突き當つて兩方に分れ、一方は第三の池までいつて十八町あり、一方は十五六町あると云ふ。いよく一同はその穴の奥深く探險することとなり、豫て用意して來た懐

中電燈をルック・サックから取り出し、各自一つづつ持参す。トップは古家氏、ついで僕、松風、簾月、耕田、二宮、秋山の順で、眞暗い穴の中の石疊を踏みしめた。

入る匆々から岩を飛び、又はかけ上るところがあつて、秋山畫伯は直ちに退却してゆき、穴の外にゐる黒犬は聲を限りに悲しげな泣き聲を立てる。それが、奥深く入つてゆく程哀れに聞えて来る。

『この水たまりの五尺ばかりをくどり抜けましたら、廣々としたところへ出ます。』

云つてから、古家氏は水たまりのすぐ上まで岩が下つてゐるところを、四ツ這ひになつてくどりぬけてゆく。それについて僕も四ツ這ひになつたが、その水の冷たい事、まるで氷とちがはないくらい。しかも足許は粘土の、つる／＼とすべるたよりなき、その間をくどりぬけるのも、一寸骨が折れた。

そこを出ると、あたりは急にひらけ、石灰洞らしい面目を、一時に發揮した。そして登りになつた足許に氣をつけながら、懐中電燈をあたりへ振り向けると、至るところに鐘乳石があり、心ないものどもが大牛かゞとして取つてゐる。これだから公德心のない一部の日本人には困る。これだけは、我等日本人として、最も心すべきことではなからうか？

ゆく程に、穴の隅々にゐた蝙蝠が慌て、飛び出して来る。その方へ光を向けて見ると、ある／＼何十羽となく、あちらに一塊り、こちらに一かたまりへばりついて、飛びまはつてゐるのは、ホンの何十分の一にも充たない。それらが、我々一行の頭の上を、すれ／＼に飛びまはるのだ。あんまりいゝ氣持はしなかつたが、僕は茶目氣を出して一羽つかまへようとした。がしかなか／＼つかまれなかつた。

漸く突當りの一層廣々としたところへ出て、そこから、穴は左右に別れてゐる。こゝで火が消えたら、容分に知られず、下手をすると、一日中穴の中をぐる／＼まひするとは古家氏の説明であつた。そこから深い池のあるところへ行くことになり、急に下りになつた粘土道をゆく程に、天井から圓柱となつて鐘乳石が地下までたれさがつてゐる。兩側には羅漢様のやうなのが澤山並んでゐた。

その時、すぐ上を飛んでゐた蝙蝠に古家氏が飛びつくやうにして右手をかける拍子に、つるりと江つて尻餅をついた。が、すぐ起き上つた古家氏は、一層ふえた蝙蝠の一羽を、今度はうまく捕まへてから、喰ひつきますよと云ひながら、一同に見せたのち、二宮君に渡した。

『二宮君、可哀想だから、にがしてやり給へ！』

と、松風先生の言ふ儘に、二宮君は蝙蝠を逃がしてやつた。

『しもたな。明るい外で逃がしてやれば面白かつたに。』

『莫迦な事を云ふな』。

松風先生は僕をたしなめてから、

『随分澤山あるもんだが、いつもこゝにあるのだらうか？』

『夜は外へ出るんだらう。』

『さうです、夜は全部外へ出るのです。』

僕について古家氏が云つてから、

『この鐘乳石を二柱と云つてみました、一方を缺がしてをります。』

まったく二柱と云ふにふさはしい、見事な圓柱が二本並び、その間をくゞれたものを、一本の中頃をかゞし取つてゐる。

八、洞中の池

二柱の一本の中頃から缺けてゐるのを惜しみながら、一同は案内人の古家氏のあとから粘土ですべる足許に氣をつけて下つてゆく。行く程に、兩側の鐘乳石は様々の形をかたちづくり、それが天井にまでつゞいてゐる。蝙蝠は相も變らず黒々とかたまり、そのうちの七八羽が電燈の光に驚いてか、飛びかうてゐる。

『こちらが二の池ですが、今日は水が増して危険ですから、向ふへ渡られん方がいゝでせう。』

この池の前で立留つた古家氏は、千古その儘と云つていゝ程に澄きつてゐる洞中の水面を指差した。まつたく澄明で、寧ろ氣味の悪いくらゐるで、水底は一尋あまりあらうか？その水底が、手に取るやうに見える。

『この水は飲めますまい？』

『飲んだ人はいやうですね。中に何が入つてゐるか分りませんから。』

古家氏は僕の問ひに答へた。それまで黙つてゐた松風先生。

「坂本、こゝが越せぬことはあるまい。君一つこして見よ。」
例の強氣で、おだてに乗りやすい僕をけしかけた。

「よし来た！一つやつて見よう。古家さん、この懐中電燈を持つとつてくれ。」
僕は両手がからになると、この池の一方に出てゐる岩へ両手をかけ、兩足を片一方の岩にかけると池の上に四つ這ひになり、する／＼と身體をつらしながら向ふへ渡つてゆく。

「わたしはこゝから行つて見ませう。」

云ふなり、二宮君は片一方の池の上へかぶさつてゐる岩石の下七八寸しか隙間のないところへくゞり込んでいつた。そこは粘土の一杯たまつた平らな岩の上で、這つてゆけばどうにか這へる。そのため、あとから出た二宮君の方が先にたつた僕より早く、池の向ふへ渡つた。

従つて、一同は僕のやつたコースをたどらず、二宮のとつたコースで、難なく池を渡ることが出来た。それにしても、とんだところで、宇治川の先陣争ひをやり、梶原源太ならぬ僕が、佐々木四郎高綱の二宮君に、まんまとしてやられた。

粘土の峻しい坂路で、簾月、耕田の兩君が腰餅をつき、僕も半ばつきかけ、土でよごれた手で二宮

君の肩にとりすがり、ワイシャツのそだけ土をつけてやる。——坂本さん、弱りますよと二宮君がよごれたワイシャツを氣にしたが、もう後の祭である。

始め一度腰餅をついた松風先生は、大事をふんでか、今度はうまくいつたらしい。ところがたうとら三の池まで来て、彼は粘土のつる／＼した坂路をくだつて、池の淵まで下らうとして片足をつるつとすべらせた。

「あぶないですよ。もうこれから向ふは水がたまつてをよつて、ゆかれません。」

古家氏の云ふ通り、向ふは水でふさがつてをり、水面から水底まで一尋半もあらうか？千古の面影をたゞへて、蒼すみきつてゐるさまは、物凄。洞中の池としては、この三の池など相當なものであらう。こゝで二分間ばかり一同は立留つてゐたが、今迄の汗も何處へやら、全身寒さを感じて來たので、直ちに引返していつた。

歸りの水溜りで、よごれた手を洗つたが、その水の冷たいこと、氷とちがはなかつた。一ところ、岩間から水の流れ出してゐるところで、この水なれば飲めますと、古家氏が云つてゐたがしかし、やはり氣味が悪くつて、如何な水好きの僕も手が出なかつた。

漸くにして羅漢穴から外面の明るみが見え出した時には、一同さすがにホツとして、古家氏、僕、松風、二宮、簾月、耕田の順に外へ出る。外は莫迦に明るく、青葉が目にしみ、暑いこと限りない。洞の外側で、悠々スケッチブックに寫生を試みてゐた秋山畫伯は、傍らの黒犬の方を振り返りながら、
『恰度一時間は待つたよ。犬が悲しさに泣きつづけたには困つたぞ！』

九、大野ヶ原

羅漢穴からは小徑ながらも、くの字くの字に曲つた上りの道が出来てゐたので、ホツと一休みする間もなく、案内人の古家氏について登つてゆく。あたりは灌木が多く、中に楓の見事なのや、桂の大木があつた。そのうちには、三椏の密生した傾斜面やら、トウキビを一杯植えたところもある。

『このトウキビ程繁殖力の強いものはないと云ふよ。』

と、松風先生が云ふ。そこも過ぎて、竹林の間を抜けると、道は四尺巾ぐらゐになり、山本旅館の側の小川にそつた大野ヶ原行の本道路と合してゐた。

古家氏はその上側にある墓場へあがり、墓のうしろへ雨合紗を置いてから、僕のルツク・サツクを背負ひ、再び先頭に立つて登つてゆく。行く程に、粘土道があらはれ、こゝはすべりますから氣をつけて下さいと云ふ古家氏の注意により、一同足許に氣をつけて登る。

『この赤粘土は、何か陶器につくれんか？』

『この土で土管や煉瓦をつくるんだよ。』

『成程、君はなんでもよく知つてるな。』

僕は、つづく松風先生にさう云ひながらも、彼の博識ぶりに感心した。間もなく、萩の咲いてゐる雑木林をくぐると、あたりの山々が一面にひらけて來たが、どれもこれと云つて見上げる山もなかつた。

三椏に至るところにあり男郎花や女郎花が、道の兩側に清く咲きそつてゐた。登る程に、今迄やんでゐた雨が、またも降り出して來たが、一同濡れるのも厭はずに登つてゆく。

『あそこに椎茸があるぞ！』

と云ふ秋山畫伯の頓狂な聲に一同足をとめてゐたが、古家氏がかまはず進むので、僕と松風先生

もそれにつき、あとの四人だけとどまつた。誰れか、多分二宮君でもあらうか、降りていつてその
椎茸を取つたらしい。

やがて間もなく、我らの一行に追いついて来た四人の連中は笑ひながら、そこらに生えてゐる茸を
見て、あれが浅野さんの椎茸でしたと、中のひとりが云ふ。椎茸の出来るやうな木組がしてあつたよ
め、つまりぬ茸を椎茸と畫伯が早合點したもので、とんだお笑ひ草だつた。それから以後、その茸を
見る度に、僕は秋山畫伯の椎茸と名付けてやつた。

雨はいよく激しく、時間も十二時近くなつたので、一同木の下陰に休むことにして、各自のルツ
ク・サツクを降す。古家は鎌で木の枝を刈り、岩の上や道の傍に座蒲團がはりに敷いてくれる。そ
こに雨をよけながら、梨とかサイダー又はドロップスを各自思ひおもひに喰ふ。

雨はやはりやみさうにない。木の下陰にゐても、木の間から落ちてくる雨滴はかなりに激しく、雨
中にゐるも同じだつた。これではきりがなかつたので、降りしきる雨の中を、再び登つてゆくことに
した。幸ひなことには、山径はさほど峻しくなく、檜山をよぎると、もう大野ヶ原の小松ヶ池迄十町
だつた。あたりは急に縦とか梅とか山毛櫨などの高山植物があらはれ、女郎花は一面に咲きほこり、

薄と能笹が入りみだれてゐた。

雨もいつしか次第に小降りになり、路もなるく、一同は急に元氣を出して、またしくうちに高原の
取つつきにかゝつた。能笹は薄とよもに密生し、高原の道の片側を圍んでゐる。片側は植林のため
に開墾され、あたり一面植林してあつた。もう植林は十年前からしく、こゝ一兩年で全部了ると
云ふ。

『黒が雉の子をとりました。』

慌たゞしく薄と能笹の間から飛び出した黒が、小鳥を喰へてゐるのを古家はもぎとりながら云ふ
それを貰ひうけた僕は、まだ温味のある雉の子を片手にさげながら、小松ヶ池の方へ一同とよもに歩
いてゆく。途中で松風先生は、コンダックスを取り出し、一同を並べて寫してくれた。それから目差
す小松ヶ池は、白旗を立て、そこだつた。

一〇、小松ヶ池

高原の直線をなしてゐる路は、すぐそこに見える小松ヶ池の白旗まで、割合に遠く、思の外に手間どつた。そして、翻翻としてひるがへつてゐる白旗の下まで来た頃には、またも雨が降りしきつて来た。そこには木の鳥居があつて、禊原の龍王様の奥の院が祭つてあり、うしろに小松ヶ池が一段歩ばかりの廣さで控へてゐる。

我等の一行は、先づ龍王様に額づき、雨の降つてゐる中を、小松ヶ池のすぐそばに、柵をこして立つた。太古さながらのどんよりと沈んだ山湖で、三百年以上を経た水の中でなければ育たないと云ふじゆん菜が、澤山あつた。僕はじゆん菜を見て、利根川べりの布佐にゐる頃、よく手賀沼でそれを採つて喰つたことを思ひ出した。

二宮君は車中、この池のそばで滅多な事は云はれません、云つたら大蛇が出て来るさうですと云つてゐた關係か、莫迦にかしこまつた顔をし、一同もそれにならつてゐた。古家氏は、池の中の小さな島に龍王が姿を現されたことがあると云ひ、池の深さは計り知れないとの事であつた。

大野の原

大蛇すむてう

池に立てば

土佐より来る

風のぬくしも

僕は、あたりの光景がさも大蛇の住みさうなところであり、龍王様が祠つてゐるのになんとなく僕味を感じ、こゝ伊豫と土佐の國境近くに立つて、思はず腰折を口ずさんだものだつた。

雨はいよく激しく、何時やむとも見へなくなつたので、片側にある開墾小屋へ古家氏が我等を案内した。そこには爐がきつてあつて、木の根が眞赤に燃えた上に、薬籠が自在に吊してあり、五十拾好の男と二十歳ぐらゐの若い男と娘が二人ゐた。その二人の娘が、見るからに健康さうに、くりくると肥えて、顔も圓くはりきつてゐるのに、僕は思はず感心し、

『あんたらは、まるで人間が違ふやうだな。見たばかりでも元氣がよさうだよ。』
と云ひながら、毎日使つてゐる五百人あまりの女工さんの顔と比較した。それらは一樣に、何處と

なく蒼白く、こんなにくりくつとして肥えたのは、一人もないと云つてよかつた。

『おゝ厭！わしら人間がちがふとう。』

若くて綺麗な方が、如何にも恥かしさうに、笑顔の儘で云ふ。

『いや、人間が違ふやうに綺麗なと云ふんだよ。それであんたら何處から来たの？』

『橋原から来ました。』

『姐ちゃんもこゝへかけとれよ。』

秋山書伯は、我等のために爐端からはなれてゆく二人の娘に云つたが、彼女たちはやはり遠慮して隣の部屋へ行つてしまつた。そこで一同は辦當を取出し、もう午後一時半近くになつて晝飯を喰つたのだつた。

腹が空いてゐたために、福山旅館でつくつて貰つた辦當がとてもおいしく、僕はすぐに喰つて了ふと、梨をとり出して、先づナイフで皮をむぎ、一つ喰つてから皮と核を入口の隅へなげ捨てた。と、その梨の核と皮をそばにゐた若い男が拾つて、すぐにむしやむしやと喰つて了ふ。つゞいて、そばのルツク・サックから取出してゐたビスケットも黙つて取つてから、叮嚀に頭をさげた。

そこへ、藤月氏が月桂冠の一升瓶を龍王様の神前へあげてゐたのを下げて、若い男のそばへ来るなり、

『これは村長さま、村長さまの御饗は寫眞でよく見て知つてをりました。』

と云ひながら、三度も四度も頭をすりつけてお辭儀をする。——立派な精神病者だつた。彼は町見村九町のもので、先生に連れられてこゝへ來てゐるとのことだつたが、あまり叮嚀にお辭儀されて、閉口したのが藤月氏だつた。

一一、雉と鮎

雨は相變らず降りしきつて、何時やむとも知れないので、最早大野ヶ原の頂上を極める元氣もくじけてしまつた。今となつては、こゝから引返すより外に仕方なく、一同は龍王様にさゝげた酒を飲みかはしてから、雨の中を歸路についた。五十恰好の男と、二人の娘とも別れを告げて。

古家氏は、道々今しがたの五十年配の男が監督で、二人の娘を始め多くの若いものを使つて、この

大野ヶ原の開墾をやつてゐるのだと云ふ。彼等は三月も四月も山に住んでゐるが、娘たちは別に不仕舞にもならず、營々として仕事をするので有名だとのことだつた。道理で、娘たちが健康そのものゝやうに張切つてゐるのだ。

藤月氏の聞くところによると、この古家氏がまた、大野ヶ原にホテルを造り、一大スキー場を作ると、松山高嶺のある教授と計畫をたてたことがあつたとか。古家氏は、高原を過ぎて、下り路にかゝつてから、この近所に、二十年過ぎた杉山百五十町歩一萬圓で賣物に出でゐるとも云つた。さすがに土佐と伊豫との境界に近いだけのことはあると僕はつくづく驚いた次第だつた。

雨は小降りになつてゐたが、古家氏が雨具を置いてゐた墓場を過ぎて、始めて浮穴村小屋の部落へ入つた頃から、又も次第に降りだした。さすがにこのあたりへ来ると、一同の中に足を引ずるやうにして歩くものも出て来て、僕などは急な下り坂にくるなり、左足の關節がひき吊つて、思はず跛をひいた。

唯ひとり、藤月氏だけは小早に歩いて一行よりも五六間先をいつてゐたが、柿の大木の下あたりへ来て、ザーと激しく降り出したため、そこに雨宿りをする。つゞく一行も急いで、その柿の大木の下

に雨宿りをしたけれども、あまりの大雨にんの足しにもならなかつた。

『山本旅館はそこですから、歩いてゆきませう。』

古家氏の云ふ儘に、一同濡れ鼠になつて山本旅館まで歩いてゆく。松風先生と古家氏は雨具を着てをり、秋山畫伯は蝙蝠傘を持つてゐたため、さほどでもなかつたが、藤月、耕田、僕の三人は濡れしよぼになつて山本旅館へ飛びこんだ。僕はしかし、片手にさげてゐた雉の子を、すぐに焼鳥にすることを忘れず、直に古家氏に焼いて貰ふことにする。

『ビールを出してくれ！』

松風先生はお上さんにビールを出させてから、一同にすゝめる。雑詰を着に、一同ビールを飲んでゐるところへ、古家氏は雉のてり焼を皿に入れて来た。その焼鳥のうまかつた事、ビールがすぐに二本空になつたことでも、明かであらう。これも偏に黒のお蔭であつた。そのあとで、僕はトウキビを焼いて貰つて、藤月、耕田の兩君にもわけてやつたが、これ又莫迦にうまかつた。

我等の一行は、急に元氣恢復し、山本旅館で傘を借り、雨の中を自動車の置いてあるところまで歩いていった。そしてそこで古家氏と別れ、一意歸路を急ぎ、大洲までは何處へも寄らなかつた。大

洲では、鐵橋の袂にあるよしのずしへ寄り、耕田君の推薦で、鮎ずしを喰ふ筈だつた。

ところが、既に午後八時過ぎになり、全部賣切れで名物の鮎ずしを喰ふことが出来ず、一同落膽した。そこへ女將が現れ、まことに申譯ありませんが、鮎がこのくらひありますから、これを何に致しませうと來た。その鮎が丁度六匹あつたので、松風先生好みの燗にして、酒杯を傾ける。

鮎は六寸あまりの上物で、酒も勝鬨と云ふ松山での上酒に、一同またゝく間に上機嫌になつた。そして歸路についたのは九時半過ぎだつたが、夜豊峠にかゝると兎が飛び出し、五分ばかり追ひつめたが、残念捕りにがした。しかし、お蔭で檜谷へ戻つたのが、午後十時前だつた。(九月廿八日記、八幡濱毎夕)

南豫の山水

一、ドルメン

三月もいよく押詰つた三十一日に、ひよつくり安倍能成氏の實弟藤井克修君が社用をおびてやつて來た。何時もながら藤井君の特徴ある風貌に接すると、僕はいかな多忙を極めてゐる折でも、何かしらのんびりとしたものを感じる。

この日もそれで、次から次へと現れる來客をよけて、藤井君の好む儘に、僕はドルメンを見にゆくことにした。そこで僕は、この半年間毎日のやうに連れて歩く純日本犬のチヨン子を供先に、藤井君をドルメンのあるところに案内した。さう云ふ僕は迂闊にも今日まで、わが家の庭から眞向ふに見えるドルメンのそばまで行つて見たことがなかつたのである。

『これはいゝドルメンだね。新谷にあるドルメンよりも完全でいゝよ。これを太古の民族が拜んでゐたんだよ。』

胸突坂をものゝ五町も登つたところにあるドルメンの前に立つた藤井君は、つくづくと感心のていで

『このおがみ石がある以上は、メンヒルのおがみ臺があるはずだよ。』

『さてよ、さう云へば、この下の臺と云ふ部落に、いゝ臺石があつたぞ！』

そこで僕は、直ちに山を下つて、その臺石のあるところへ彼を案内していつた。彼はその臺石を見て、あまりに小さいと云ひ、眞向ひの國造神社の境内に視線をおくり、この邊らしいとつけたした。さう云へば、その三瓶町の氏神である國造神社の境内は、岩石をもつてなり、しかも不思議なことは圓になつてゐた。

『成程、あの境内がメンヒルだつたとすると、何百人の人数でも集まつて、ドルメンをおがめるわけだ。それではあそこへ行つて見よう。』

僕は汗を一杯流しながら、柴犬のチョン子をつれて、又も山道をたどり、そこだけ圓く丘になつてゐる境内へ、彼を連れていつた。と、そこからなんと、眞向ふにおがみ石が恰もスフィンクスの如く鎮座しますではないか！さすれば、この岩石の上に集まつて、太古の民族が、あの奇岩を拜んでゐ

たのか！

僕はこゝで、計らずも十四五年か二十年のむかし、文展に出てゐた繪を思ひうかべた。それは、臺石の上に集まつた太古の人々が、火を焚きながら、遙か向ふの石を拜んでゐる光景を描いたものであつた。それをそつくりこゝへ持つて來ることが出来る。僕に今若し繪を描く才能があつたなら、曾て文展で見たもの以上のものが、あるひは描かれたかも知れない。

この境内から向ふの、今來たばかりの部落を、臺と稱してゐるのも、あるひはメンヒルのおがみ臺から來たのかも知れない。それにそのおがみ臺の上に國造神社が鎮座しますが面白くないではないか！二人はそこで暫らくとどまつてゐてから、正面の高い石段を下りていつた。

『その向ふの三瓶トンネルの手前には、穴居の跡らしい穴があるさうだから、この邊には太古の民族が澤山住んでゐたんだね。君一つ、ドルメンとメンヒルの道しるべをつくり給へ。』

『そりや是非作るが、この邊はさうすると太古にあつては南豫に於ける文化の中心だつたのかも知れないね。』

『さう云ふことになるよ。』

藤井君は癖の眼を細めて笑顔になりながら

『まだこの邊には、澤山ドルメンがあつたにちがひないよ。』

『さうかね。兎に角、今日は近來にない見事な收穫だつたな。』

僕は、五時のバスで藤井君が八幡濱へ歸るまで、それを云つて心からこの日のメンヒルの發見を歌んだものだつた。

二、雨中出發

あくれば四月一日——昨日のドルメンを探つたためか、それとも明日は公休日だと云ふ氣のゆるみか、身體が怠儀で仕方がない。そのため、明日八幡濱の丸喜工場と日土の盛壽タイル工場の慰安會に招かれてゐるのを失禮しようと思つてゐる。かゝるところへ、松風先生より電話がかゝり、

『明日と明後日の休日を利用して、滑床探見に早朝から出掛けるから、用意をしてをれ！』と云ふ。

『實は僕、風邪がみか、少々怠儀で行けさうもないが……。』

『弱いことを云ふな。同勢六人で、君も入れてある。』

『さうかなア……。』

それきり電話は切れてしまつた。僕は今年に入つてから、まだ一日も休んではゐなかつたが、昨年の暮に全四年ぶりで歸つて來た病妻が患つたり、次男や三男が風邪を引き、松山へ行つてゐる長男までかなり激しい風邪をひき、それらの看病で身體がたくただつた。その上に、工場の方は時局柄稀に見るの忙がしさだ。こゝらで僕も、人並に今年大流行の風邪でもひいて、二三日病床に臥せてみたかつたところへ、松風先生よりの電話である。

『よし、それなら一つ、滑床探見で大いに英氣を養つてやるぞ！』

決心すると、現金なもので、僕の身體はみる／＼うちに張りきつて來た。僕はこゝで、思ひ出さずにもゐられない事がある。それは僕がまだ十七八の頃、春の試験休みを利用して、吉田町の三瀬澄之助の自宅を訪づれ、二人で滑床にある雪輪の籠を見物にいつたことであつた。

僕にとつては、あの折吉田町に二三泊したのが、旅に出たはじめだつた。あの時の思ひ出は廿五年

を過ぎた今日でも、いくらか覚えてゐる。その滑床へ、明日はいよいよ一行六人で出掛けるのだ。僕たるもの、元氣を出さずにゐられるものではない。その四月二日は、早朝から春雨がしとくと降りしきり、あちこちの吉野櫻も七分方綻びてゐた。折角の日曜日を、しかも丸喜と盛壽は大事な慰安會を、雨に降りこめられてはさぞかし弱つてゐることだらう。この雨では、さすがの松風先生も滑床探を中止するだらう。

僕はそんな事を思ひつゝ、八時過ぎ工場の事務所へ鍵を出し、先づ松風方へ電話してみた。ところが先生は大變な元氣で、もうすぐ車を出して君の方へ行くから準備をしてをれと云ふ。こいつは豫算がはづれた。八幡濱から三瓶まで車が四十分かゝるので、それまでには樂に用意は出来るけれども、なんだか氣忙しく、僕はすぐに自宅へ歸り、病妻に登山服を取りださせる。

曾て富士登山をした折の安價な登山服で、身につけて見ると前のボタンが合ひかねた。次に長靴下をはき、その上にゲートルをまき、いよいよ草鞋をはいてゐるところへ、一行五人の乗つた車が、玄關先へ着いた。この車こそ、昨年面河へ連れて行つてくれたり、大野ヶ原へつれていつてくれた車だ。それに乗ると、春雨に煙る三瓶の町はすぐに過ぎて、金毘羅神社の下あたりの町はづれに出た。

「松風、こゝで一つ、三瓶のドルメンを拜んでくれ！」

「ストッププーよし、みんなドルメンを拜んで行かう。」

僕の提案で、松風、耕田、僕の三人と、前の運轉手臺の一君とその横にゐる春坊、乙甫も車から雨の降る外へ出た。そこで僕は、遙かの彼方に、春雨に煙るドルメンを指差し、メンヒルの國造神社の境内までもそれと示してから、出發の幸先を祈つた。

三、山田薬師

我等一行六人を乗せた車は、三瓶トンネルの手前までは二つある驛道の、俗に和田道路と云ふ海岸よりの方をひたぶるに登つてゆく。因に和田道路とは當時の縣會議員和田清治君の力に負うところ多いための、良く云へば褒め言葉であり、悪く云へばけなし言葉である。

その和田道路からは、登るにつれて三瓶の全町が一望のもとに見える。如何にも小ぢんまりとした入江の町として、一寸捨てがたい味を出してゐる。帆布、入山の二大工場の煙突が一番目立つて見え

る。町はづれの畑から山々にかけて、櫻やら桃、李が七分咲きながら、雨の中に咲き競つてゐる。

『坂本、三瓶も萬更ら悪くないぢやないか？』

『あたり前や。』

『この邊へは何年ぶりに來とらう？もう四五年ぶりかな？』

『さうかな。この邊に穴居の蹟があるらしいよ。』

松風先生と僕が話しあつてゐるうちにも車は次第に登つてゆき、やがて峠の三瓶トンネルへさしかつた。この三瓶トンネルを越すと道は下りになり、前面に宇和盆地が展開する。耕田、春坊、乙甫の三君は始めてのコースらしく、廣々と展開した宇和平野が珍らしいか、盛んにいゝなアと激賞する。

『あの池を見給へ！青磁色をしてゐるだらう？あの青磁色から焼物の青磁が生れたんだが、なんとも云へぬいゝ色をしてるぢやないか、耕田君！』

赤松の並木ごしに見える峠近くの池の面を指さしながら、松風先生は癖の談博ふりを發揮する。その青磁色で、僕は青磁色の手絡をかけた女を思ひ出し、中年増のセンジュアルな感じのこもつてゐる。

ことを一同に話してやる。それをまた乙甫君は、兩人の性格がよく出てゐると云つて喜び、雨にとちこめられた車中も、ために笑聲が絶えなかつた。

車はいつか宇和盆地の中心へ出てゐた。我等のまづ最初にゆくところは、山田薬師であつたから、間もなく右方に別れてゐる道へ、車はカーブして入つていつた。この山田薬師へは一昨年十一月下旬、いよく明春場所から東の小結に内定してゐた前田山を連れて、僕は参詣してゐる。

前田山はまた、角界入りをする前に伯父伯母が宇和町にゐる關係から、山田薬師へ参詣してゐて、僕が連れていつたのが、二度目のお詣りであつた。そしてその翌春場所は十一勝二敗といふ好成绩で玉錦をはじめ三役以下を撫で斬りにして、三段跳の小結から大關になつた事は、世人の等しく知るところである。その前田山を心から可愛がつてゐる松風先生が、今年四十二の厄除けに、靈驗あらたかな山田薬師にまづ参詣するのは、好ましい限りであつた。

さすがは行基菩薩の開基だけあつて、山田薬師の附近は古風な家屋が、まづ一行の目につく。やがて山門前で車をとどめ、春雨のそほ降る中を、石段づたひに本堂の前までいつて、恭しく同額づいた、境内のさびてゐると、本堂の古びてゐるのがしつくりと解けあひ、自然石の石燈籠に、えも云

はれぬ風情があつた。

こゝで松風先生が便通をもよほし、民家の厠を借てゐる間に、僕はすぐ隣にある三瓶神社へお参りにいつた。この神社から三瓶の町名が生れ、始めは三瓶町の火寄崎にあつたのが、こゝへ遷宮したのだ。それだけに、僕は懐かしく、お参りしてから、境内の白椿の花を一つ頂いて歸りかけてゐるところへ、耕田、乙甫、春坊の三人がお参りに来る。つゞいて松風先生も、ハンカチで手を拭きふきやつて来たことだつた。

四、明石寺

三瓶神社の境内で僕が頂いた白椿の花を運轉手の一君にやると、一君は運轉臺の中央にその一輪の白椿を飾つた。それが車の運轉中、得も云はれぬなごやかな感じを一同に、わけても僕に與へてくれたのは、一つに三瓶神社の御利益だつたか？兎に角、乙女椿とか山椿とか、椿にも色々の種類があるけれども、清淨無垢の白椿が僕には一番氣に入つた。

我等を乗せた車は、いつか又元の本通りへ出て、卯之町の入口で、八幡濱から宇和島へ行く驛道へはいつていつた。そしてその卯之町を半ば過ぎたところで、車は左にカーブした。兩側には古風な家が並んでゐる。云はずと知れた四國靈場第四十三番の明石寺へ行く道だ。

行く程もなく車を捨てた一同は、一君だけ車の番に残しておき、そば降る春雨の中を、左手に廣場右手に神武天皇の御像の間を進んだ。恰度時節に入つてゐたので、三々伍々の巡禮に行きあひながらいつか杉山の中へはいつてゆく。このあたりから、急に山路も峻しく、いかにも四國靈場らしい感じが目から生れて来る。

杉山には時たま赤松も交つてゐたが、それらも一様に亭々として杉の如き形をしてゐた。これこそ朱に交はれば赤くなるでも云ふべきか？やがて斷崖を切りひらいたところが峠道となり、そこからはだら／＼下り道である。

『おや道をまぢがへましたか？』

と云ふのは乙甫君。

『向ふの森の透間から、お寺の屋根が見えますよ。』

と指さしたのが春坊。

こゝに來ても雨合羽のお遍路さんに行きあふ。いつか谷間の樋からチヨロ／＼水の流れてゐるところへ來ると、松風先生茶目氣を出して、

『石榎の水を飲みほした坂本石創！どうぢや？一つこの水も飲んでみんか？』

とからかつた。

『よし來た！まづ手はじめにこゝから飲むぞ！』

僕は別に飲みたくもなかつたが、一寸口をあてゝ一口飲みかける。それを、乙甫君が、

『およしなさいよ。雨水はお腹をこわしますから。』

と、とめたその時にはもう一口飲んでゐたが、あまりうまくなかつた。

『なアに、僕はこの五六年來、たゞの一度もお腹なんかこはした事がないよ。』

僕の癖の強がりに、耕田君が先づ吹き出して、松風乙甫、春坊の三人がそれにつゞく。斯くて朗らかな一行は、四國靈場に唯四つしかないと云ふ天臺宗に屬する明石寺の前に現れた。そこで乙甫君が賣店の小娘から一同の線香を求めてゐる間に、あとの四人は杖やら帽子をそこへ預けて、間もなく本

堂の前に額づく。そこに一人、五十恰好の男が、一心不乱にお經を稱へてゐるのが、我等の目を惹いた。右隣の大師堂の前に、見事な幾百年も経つた櫻の古木があつた。山門の並びには、奈良の春日神社の境内に澤山あると云ふナギの木が一本、枝を擡げて立つてゐた。

僕は、山門から本堂がすべて赤瓦になつてゐるのに、なんとなく風情のない思ひを味はつた。しかし、松風先生に云はすと、あの赤瓦でなくては、霜雪のために破損してしまふとのことであつた。

再び賣店の前に戻つた一同は、小娘から預けた品々を受取り、歸りがけに明石寺の隣にある神社も拜んだ。そして、大半引返してから、西園寺公の墓があると云ふ標札を見て、その方へもまた出かけていつた。この卯之町は、その昔、戰國時代までは西園寺公の莊園であつたのだ。

五、野村川

僕は昔から何にかしら河川が好きで、わけても利根川をこのみ、ある年は栗橋に、ある年は布佐に前後二ヶ年あまりと云ふもの、利根川べりの町々に住んだことがある。それが郷土へ歸つて十年、肱

川に興味を持ちながら、未だに卯之町から向ふの、脇川上流をなす野村川にそくて、野村へゆくコースは處女地であつたが、今日漸く目的を達して、我等の車は野村への縣道にはいつた。

このコースは、僕のみならず松風先生から耕田、春坊の兩君もはじめてだつた。それだけに、路面にそくてゐる野村川の溪流に、我等の視線が多くそゝがれたが、別に特筆する程のところもなかつた。唯河原にある岩石に、悉くと云つていゝ程苔のついてゐるのには感心した。

『この板ヶ谷橋の向ふへ、よくトラックでオガ取りに來たものですよ。』

一君は運轉しながら後ろへ振返つて云つた。

『成程、淺野君がよくこの板ヶ谷へ行つて來ますと云つてゐたが、こゝまで來たんだな。』

僕は石炭がはりにオガを使ひ出して、もう二ヶ年餘りになる事を思ひうかべた。この板ヶ谷橋から向ふの山道をトラックが入つていつて、三瓶の工場までオガを持つて歸るのは容易でなかつたらう。今はガソリンが統制されたため、こゝからオガを持つて歸るのは中止されてゐる。

車はいつか溪筋村の出合橋の袂に來てストップした。松風先生がさつきから藥を飲む水を欲しがつてゐたのが、そこに樋から清水が水槽にチヨロ／＼と流れ出してゐたからだ。こゝらの溪谷には、な

かく／＼に人目を惹くものがあつた。わけでも、巨岩の川中に突出してゐる上に、松の生えてゐるのがなんとも云へなかつた。

やがて車は、伊豫電鐵の野村發電所の前に來た。そこからは溪流にそくて一面の櫻で、正に七分方咲きそろつてゐた。野村町は、その櫻並木からすぐだつた。高原にある小さな町と云ふよりも村落に近く、町の入口に新築したばかりの小學校の校舎が、ひとり光つてゐた。

町の中程にある清家旅館の前も過ぎ、町はづれ近くのうどん屋の前で、車をストップさせた。そこから、乙甫君が樂やら菓子やらを買ひ求めにいつてゐる間に、耕田君と僕はうどん屋へ入つて、手打ちうどんの試食をやつて見る。つゞいて春坊から一君もやり、買ひ物から戻つた乙甫君も一杯ひつかけたが、松風先生だけは腹具合がわるいと云つてやらなかつた。

『わたしはこゝへ嫁入つてから間もなくうどん屋を始めまして、もう五十年になります。まだ一度も警察に御厄介をかけたこともありません。あの柳ですか？あれはわたしがこちらへ來ましてから蓋木して太らしたものです。もうあんなになりましたよ。』

うどん屋の媪さんは、僕が一本酒をつけて飲みながら聞いたのに對して、ざつとこんな返事だつた

そこで、いくらか暖まつてから、車にのつたが、車中では乙甫、耕田の兩君が、うどんが拙づかつたと云ふ。僕だけは別にまづいとも思はなかつた。

野村から坂石までも、かなりの時間がかゝつた。坂石へ行きさへすれば、うまい鱈があると云ふので、一同それを楽しみにしてゐただけ、それだけ坂石が待ち遠しかつた。その坂石へ、宇和川橋を渡つて入つて見ると、三階の旅館が二軒並んでゐただけで、二軒とも鱈は元より、晝飯も出来んと云ふ。

腹が立つたが、出来ぬものは仕方がなく、車を高丸橋の向ふにとどめ、そこから河原へ降りていつて、ルック・サツクの中から食料品を、パンやらバターやら、ハム、寶來煮、リンゴ、ミカンなばを取り出した。ウキスキーも一本はあつた。こゝでピクニックをやつたと思へば、眞向ひの旅館が宿にもさはらんと云ふものだ。

六、高丸橋

いつか雨の降りやんでゐる河原へ出た六人は、川向ふの三階建の旅館を見上げながら、でもいさゝかいまくしい視線を送つた。わけても楽しみにしてゐただけ、松風先生の憤慨は甚だしかつた。こんな事なら、野村で中食をやつてゐた方がよかつたと云ふ思ひは、松風先生のみではなく、一同の等しく味はつたことである。

高丸橋下、清流のそば近く、坐り工合のいゝ石の上に面々が腰をかけてゐるところへ、唯一人はなれていつた一君が、小さな女竹を切つてきて、一同の箸をつくつてくれる。乙甫君はウキスキーの栓をぬくやら、ハムの罐を切るやら、寶來煮の蓋を切りとる。そこで松風先生が一同にウキスキーをすゝめる。水は前に流れてゐるので、ウキスキーを一口飲んで、すぐその水を飲む。

飲む程に酔ふ程に、一同はパンを食ひ、食後のフルーツにはリンゴとミカンを喰ふ。ミカンの好きな僕は、見るみるうちに大きいのを、七八つ平げて了つて、皆んなをびつくりさせた。リンゴの好きな耕田君は、ゆるゆるとリンゴばかり喰つてゐた。

『春ちゃん、石投げをやつて見よう。』

云ふなり、僕は旅館へ向つて小石を投げたが、川の七分方のところでポトンと落ちた。

『僕がやつたら、宿屋へあたりますよ。』

『なに、あたりやせんよ。』

春坊は自慢たらしく石を投げたが、さすがに自慢するだけあり、向ふの川岸近くの水中へポトンと落ちた。つづく一君の小石は殆ど川岸までとどくところであつた。それによつても近く見える川向ふの、なか／＼に遠く、それだけに川巾の廣いことを證明してゐた。唯、兩岸ともに山がせまり、なんの展望もきかないのが、あたりの風景を小さくしてゐる。

食事をすますと、松風先生と僕の二人が先づ河原から通りへ上り、高丸橋を渡つて、本通りを向ふの方へふら／＼歩いていつた。そしてカーブしたところの角石と省營バスの標札の建つてゐる場所へ来ると、近永からのバスが、廿人ばかりの乗客を乗せて来た。そこで、標札を見ると、大洲行が二時三十九分となつてゐたので、松風先生が時計を取出すと、びつたり合つてゐる。さすがは、鐵道省の經營であると、二人とも感心してゐるところへ、我等の車やら、耕田、乙甫、春坊の三人が来たので、またも車に乗つて、いよいよ魚成の龍澤寺へと志ざす。

坂石から魚成へのコースは、野村から坂石までのコースよりずつと風光に富んでゐた。殊に黒瀬川

を渡つて、三階の家が河岸に並んでゐるところなどは、捨てがたい味があり、そこが河底であつた。

また龍の口と云ふかはつた地名のところも過ぎて、魚成橋を入ると魚成だつた。

魚成は大村と見え、街道の上の山にあちこち人家が見える外には、ゆけども行けども人家がなかつた。漸くにして人家に入ると、そこに見事でモダンな小學校の校舎が現れ、校舎について村役場と一緒に仲よく建つてゐた。その角から入つても龍澤寺へは行けるが、寧ろこの儘眞直にゆかれた方が近いと教えられた。但し、途中の橋が壊れてゐたら、そこから歩かねばならないとのことだつた。

人家をはなれると、急に展開されたあたりの光景に、松風先生は感激し

『成程、こんなところにこんな所があるのか！武陵桃源だね。こゝへ島津公がお寺を建てられたとは、さすがにお偉い方だね。』

と、形を改めて云ふ。

『本當にいとところですね。なんか世離れてゐますね。』

と耕田君も感心する。その急に開けた高原の道を、車はゆる／＼と登つてゆく。高原のあちこちに人家があり、桃の花やら李の花から、櫻の花が咲いてゐる。

七、龍澤寺

壊れかけの橋のそばまで来た時、こゝからとは違ひますかと一君が聞いたのを、松風先生は違ふだらうと答へた。それで、車は猶もゆるやかな坂路を、山間へとわけ入つていつた。ゆく程に、先方もリヤカーを引いてゆく人の姿があらはれ、その人にきく爲に急いで追ひかけた。それを邪魔になると思つたらしく、その人はリヤカーを引いて小走りになり、遂にリヤカーの片輪を溝に落した。

「一寸お伺ひしますが、龍澤寺へはどう参りますか？」

一君は、あまりに純朴なその人に恐縮しながら、窓から顔を突き出してきく。

「龍澤寺でしたら、この下の二つ目の橋を渡つてゆくのですが、車は渡れませんよ。」

そこで一同は車から降り、一君だけ車で小学校の手前をまはつてゆくことにする。やはり、一君が云つてゐた橋を渡つてゆくのだつた。その橋は三間あまりしかなかつたが、ホンの假橋のため車が渡れないのであつた。

一間巾の道は、またも山峡へつゞき五六丁もゆくと、岨ふに森が現れ、今度こそ龍澤寺らしい堂塔

の一部が見え出した。今迄、二度ばかり、龍澤寺と思ひちがへて来たのだつた。それが近寄るに従つて、寺領の一部であることが分つた。

やがて一行五人は、見事な杉並木の下に、石疊の参道のあるのにびつくりしながら、その道をとつた。そして、龍澤寺の正面までゆくと、小川があり、その上の屋根つきの橋を渡つて、石疊を三間もいつたところに、石佛の六地藏があつた。そのうしろには、すばらしい仁王門がある。

鳥巢 堯野 樹

魚躍 禹門 淵

仁王門にかゝつてゐる聯に、松風先生がまづ驚嘆し、つゞいて僕も感嘆これを久しうする。この仁王門を過ぎると、精巧な石疊の石段がつゞき、見上げると、これは又堂々たる山門であつた。斯くの如く立派な山門が、かゝる山間の僻地に巖然として建立されてゐようとは誰が想像したことがあらうさすがは、薩隅日三州の太守島津元久公の長男梅壽丸、のちの仲翁守邦禪師の開山だけある。

山門の偉大さは、太山寺のそれに優つてゐるだらう。しかも、圓瓦に圓に十の字の島津家の紋がちりばめてあるのが、人目を惹く。この山門から、またも石段づたひに、中雀門を入ると、境内の向ふ

に本堂が一際高く、石段の上にとつしりと建つてゐた。

『見事なものだな。一つ中を見せて頂かうぢやないか？』

松風先生の云ふ儘に、乙甫君と僕が庫裡の方へゆき、お布施を包んでから、和尚が病氣で休んでゐられるので、代りに出た娘さんに渡した。猶、僕は娘さんに龍澤寺の由來記を貰ひうけて、一同にくぼつてから、本堂へ入つて見た。本堂のうちは、晝猶暗く、はつきりと見ることが出来なかつたが、それでも大きな一間四方の袴に書いた畫やら、開山堂も拜觀した。

本堂を出てから僕は、衆寮に養蠶道具が一杯つめこまれてゐたのに、なんとなく痛ましい感じをうけた。耕田君が来る車中で、この頃は龍澤寺も會計が苦しく養蠶をやつてゐると新聞に出てゐたと云つてゐたのを思ひ出した。衆寮につよく禪堂も見て、一行五人は腹の底から清淨の氣になり、木蓮の花に一層それを感じながら寺を下つた。

車は既に、仁王門前の橋の向ふに来てをつたが、一同はそれに乗るのをさけて、またも杉並の石疊道を歩いた。こんなところに一泊してみたいと、松風先生は云ひ、どうだ！泊つてみるかとも一同に云つたものだつた。がしかし、まさかこんなところに、しかも住職が病んでゐる寺に、泊るわけにも

ゆかなかつた。

八、松 丸

龍澤寺の前を流れてゐる谷川にそつて、車は高原の魚成村を横切り、いつか小學校の隣へ出た。ここからは逆コースで、行く程に芝居歸りの老若男女に何人ともなくすれ違ふ。一君の話では、山間のこゝとて豊芝居をやつてゐたのが、今引けたのだとの事。しかも先般、三瓶へて來てゐた中村紫香、澤村百之助の一行で、僕は見物にいつたわけではないが、一行の三味線ひきの畫帳に字を書かされてゐる。

逆コースは、魚成橋を渡ると終つた。それから、又も山峽の道をたどつていつたが、何時の間にか河川は脇川の反対側に流れて、土佐へ出てゐる四萬十川にかはつてゐた。その四萬十川にそつて近永街道を、車はひたぶるに駈つてゆく。

雨こそ降りやんだが、どんよりと曇つた空のもとには、暮にも早く、一行は唯松丸へ着くのを待ち

こがれた。がしかし、魚成から松丸まではなかく、高川村を過ぎた頃から、またもポツ／＼と雨が降り出した。これでは、明日の滑床見物も思ひやられたけれども、大體天氣にならうと云ふのが、一同の一致した意見だった。

いさゝか車に乗り疲れたか、最早あたりの風景にも心動かず、松風先生は腹工合のわるい事をいたづらに訴へ、遂に車をとめて薬を飲む。僕と耕田君も、ついでに水を飲んだが、雨が降り出してからめつきり寒くなつてゐるので、幾らも飲まなかつた。唯、到るところ、雨中に櫻花の爛漫と咲いてゐるのが目をひくのみ。

やうやくにして明治村の松丸へ入つたのが午後六時で、その一番いゝ旅館と云ふ杉山旅館の前に車をとどめる。見たばかりの旅館だったが、女中の案内で奥の二階の三間つきへ入り、袍衣に着かへる。風呂が沸いてゐると云ふので、松風先生と僕がまづ最初に入る。

「坂本、いゝ井戸ぢやないか！」

松風先生は、五右衛門風呂に入る前に、女中が水を汲んでゐる井桁の大きな井戸を見てつくづく感心した。さう云へば、見るからにとつしりとして、古風な井戸であつた。

一同が風呂をすませた頃には雨も降りやんで、明日は大分降るやうなこともあるまいと思はれた。そして、女中が相憎何ありませんと云つてゐた夕食も、出されて見ると、萬更でなく、酒だけは持參の月桂冠があつた。

「明日は六時に出發するぞ！」

松風先生は、一杯又一杯の間にも明日の事が氣にかゝるか、決然として云ふ。それではそのつもりで、案内人に云つておきませうと、乙甫君が耕田君を返りみる。

飲む程に酔ふ程に、僕は若山牧水直傳の短歌の朗詠をはじめめる。それがきつかけで、松風先生が一つ二つ短歌をつくつたが、どれもあまりに寫生味がかゝつてゐて、耕田君と僕がけなすと

「そんなら一つ、坂本、つくつて見よ！」
と來た。

「よし、つくつて見るが、どうも即席は拙いよ。」

「藝音を吐くな！日頃の高言の手前があるぞ！」

「云つたな。それぢやア……櫻咲く伊豫路をゆけば順禮の、娘に遇へり清き眼なりき……こいつは

拙いが、實感だよ。』

云つてゐるところへ、五十恰好の案内人が来てくれたので、直ちに打合せをやる。それもすむと、案内人にもビールをすゝめて、九時過ぎに夕飯をすませた。

食事中、女中の話に、道具屋が町の中程にあると云ふので、掘出しをやらうと云ふ事になつて、食後、僕が先頭に立つて六人の同勢が、その店へ押しかけて見た。ところが、何一つこれと云ふ道具はなく、女中が骨董屋とも云つてゐたのに引きくらべて、一同あいた口がふさがらなかつた。

九、杉山旅館

十時過ぎに床についたが、僕はすぐ寝付かれさうで、どう云ふものか寝付かれない。風邪ぎみのためかとも思つたが、敷蒲團の短かく、足の出るのに閉口して、僕は朝方までたうとう一睡もしなかつた。隣の松風先生も寝苦しい様子で、起きてから聞くと、やはり殆ど寝てゐない。

それでも、六時にはもう床をはなれ、松風先生は昨夜寝込んでゐた朝風呂に入る。僕にもすゝめたが

断つて直ちに顔を洗ふ。空はどんよりと曇つてゐたが、どうにか雨は降らず、ひやく／＼するところから、もう上天気になる前兆らしい。そこで、顔を洗ふとすぐに、仕度にかゝる。

『案内人がまだ来てゐないぢやないか?』

朝風呂から戻るなり、松風先生が耕田、乙甫の兩人を見ながら訊く。

『六時には来ることになつてゐるのですが……。』

と答へたのが耕田君。

『あれ程しつかり打合せしておいたのに、頼りない案内人ですね。』

と云つたのは乙甫君。

そこへ、女中が朝飯を運んで来たので、僕はゲートルがけで膳につく。その他の面々も足指えは充分に出来てゐた。今は唯案内人さへ来ればいゝのだつた。

暢氣な案内人は、一同が朝飯をすませた七時頃にひよつくりやつて来た。同時に氣早な連中は、杉山旅館の女闘先へ出ていった。僕も草鞋を貰ひ、女闘先ではきかけてゐると、鼻の先にたゞならぬ脂粉の香が漂ひ、すうと女闘先から若い藝妓が通りへ出ていった。

『おやッーあれは八千代に違ひないが……。』

後姿を見送つて、僕は思はずつぶやいてから、そばのお上さんにあの妓はたしか三瓶から卯之町へ仕替してゐた筈だと話してゐるところへ、ひよつこりその妓が引返して来るなり、

『あらッ、さアさん、どちらへ行くの？』

『オイ、あらッでもないぞ！お前のKは今戦線で大活躍をしてゐると云ふのに、朝つばらからお前はなんちうさまだ！』

『お合憎さま。相變らずさアさんは口が悪いわね。』

『何云つてるんだい。たまにはKにたよりぐらゐ出せよ。』

『Kさん元氣よ。』

云ふなり、八千代はトン／＼と二階へ上つて行つた。あとでお上さんにきけば、彼女はこの二月程前に寒地から来たとの事、さすれば、三瓶から卯之町、宇和島と、僅か一ヶ年あまりの間に三ヶ所もかはつてゐるわけだ。

やがて案内人を入れた一行六人は、神武天皇祭で日の丸の國旗が軒ごとに掲げてある松丸の町に立

つた。一君だけは、車に乗つて宇和島の方へ出て、閑があつたら向ふから登つて来ることにしたのだつた。

『どうも有難うございました。』

杉山旅館のお上やら女中に送られて、朝あけの町のかなりひや／＼した空氣の中を、六人の同勢はスタ／＼と歩き出した。行く程もなく、町はづれの橋の上に来たので、先づ春坊がカメラを取出し、つゞいて松風先生もコンダックスをとり出して、後の四人をモデルにする。

近永街道から別れて、いよく滑床への一間あまりの道へかゝつたところへ、あとから一君の運転する車が追ひついて来た。そこで一寸話してから、またも二つに別れて、一行はかなり急いで歩く。そのため、案内人は一番あとになつた。

見上げる鬼ヶ城には雨雲がかゝつてゐたが、それでも原始林の密生してゐる中腹のあたりが、手に取るやうに見える。道は坦々たる田の中の一本道で、ものゝ十町あまりも行くと、幾らかスロープをなし、いつか山路にさしかゝる。

一〇、峠の心中

新芽をふきかけた樹木の密生してゐる山々の、ホンの序の口にある山を、我等の一行は登つてゆくさすがに垣々たる路面を歩いてゐたやうにスタク／＼と登つてゆくことが出来ず、急にゆる／＼とした足取りになる。それでも案内人がしんがりゐるので、

『あなたが一番先にいつて貰はねば困りますよ。』

と、耕田君が注意した。

案内人、乙甫、春坊、松風、僕、耕田の順で、赤土道の山路を登つてゆくと、さすがに登山の快感を覚える。しかも先頭の三人はいづれもルック・サックを背負つて、いつかピッチをあげた。そこへ案内人の伴が、十七八の青年学校の姿で、辨當をさげて追ひついて来て、それがトップになり、案内人がまたもラストになつた。

山路は次第に峻しくなつていつたが、若い者が先頭に立つたためか、乙甫、春坊の両君も馬力をかけ、三人だけ先の方をゆく。つゞく僕は、草鞋ばきの足が、雨あがりのために濡れるのを気にしながら

ら、一問ばかりおくれていつた。そのあとを二問あまりおくれて、松風先生が耕田君や案内人と、あたりの風景を觀賞しながらついて来る。

赤松の多い山を、いつか七分方登つて見ると、あたりの光景は一變していつた。松丸の方は僅にその一部分をのぞかせてゐるのみで、あたりは山又山に咲いてゐる山櫻の、處々に見出せるのが、もつとも我等の眼を歡ばせた。

『櫻は、吉野櫻もいゝが、風情のあるのはなんと云つても山櫻だな。』

一行が一息入れて一分間あまり立留つてゐる時、松風先生が誰にともなく云ふ。そこから頂上は、もうすぐだつた。その頂上を思つたよりもやすく／＼と極めると、道は急に平坦となり、落葉が堆くつもつてゐた。そしてそのあたりは、梅や縦が一面に生えて、見るから面白いその枝ぶりに、一行は暫し見とれた。行く程もなく、

『こゝに大阪のいとはんと番頭が心中してゐたさうです。』

若い衆から聞いたと見え、先頭の次にゐる乙甫君が振り返りざま、一段低くなつた窪地を指さしながら云ふ。

『こゝとは違ひます。もう少し向ふへいつたところですよ。』

しんがりの案内人がそれを打ち消して、本當に二人が心中したところを、一行に知らせてくれた。

そこは原始林にとりかこまれてゐて、一寸他から見出しにくいところだつた。そこに來て、やうやく心中したと云ふ大阪のいとはんと若い番頭の事が、一行の話題の中心になつた。

『戀愛の極致は心中にある。心中にまでゆかぬ戀愛は、本當の戀愛と云ふことが出來ぬ。』

田山花袋ばりの戀愛論を、いさゝか脚の疲れた僕がわざと眞面目くさつて云つてゐると、松風先生はすかさず、

『坂本、心中の歌を一句作つて見よ。』

と來た。

『歌なら一首だらう。』

『何んでもいゝから、一首やれよ。』

『フフン……松の葉でさゝ二つに落ちる……。』

『そんな俗謡ぢやあかん。俺が一首つくつて見る。』

云つてゐるうちに、山路はいつか下りになつて、行く程もなく六坪あまりの平地の、梅の大木が枝をはりひろげてゐるところへ出たので、そこで一休みする。そして一同がネーブルを喰つてゐる間に松風先生は何處かへ雲隠れしていつた。云はずと知れた野糞をするためで、それで遂に歌も出來ずひだつた。

一一、滑 床

一行が一休みした廣場からの下り路は、急に峻しく、くの字なりにカーブしてくだつてゐた。路の兩側には相變らず密生した原始林が空一面を蔽うて、晝猶暗く、空氣はヒヤ／＼として冷氣とみに加はつた。但し昨夜來の雨氣は跡方もなく、すつかり晴れ渡つた好天氣になつてゐた。

堆い落葉の山路を下りきつたところに、四万十川の上流をなす溪流に突きあたつた。そこでその水を松風先生が飲み、僕がつゞいて、二三人飲んだが、清冽なわりに冷たさは少かつた。石樋の水とは到底くらぶべくもなく、それだけ溪谷の淺さを證明してゐた。

溪流を、飛び石傳ひに渡ると、路は溪流にそうてゐて、今迄のやうな険しさがなくなつてゐた。僕はそこでホツとした。と云ふのが、既にいさゝか脚の痛みを感じだしてゐたからである。それだけに朗らかになり、溪流の兩側に生えてゐるしら木の若芽から、何處までいつても白木ばかりなのに目とれた。その白木は、一寸白樺のやうな感じのする木であつた。

『この石は、盆栽にしたら屹度いゝのがあるに違ひない。』

該博な松風先生が、乙甫君を返り見て云ふ。そこで乙甫君が路から溪流へ下りていつて、二つ三つ小石を拾つて見る。なかくいゝ石がありさうだつたが、手間どるし、重みもあるので、拾ふのをやめて下りを急いだ。急ぐ程に、いつか自然林の伐採したところへ出て、あたりの風景は急に凡景になつた。溪流も露出して來た。

路には枕木を敷いたところが多くなり、處どころ枕木を組合せたばかりの上を歩かねばならなかつた。その上を、案内人の伴と春坊の兩君がトップを切つてゆく。行く程に七間ばかりの橋が架かつてゐるところへ出る。こゝで今迄の溪流が滑床川の本流に合してゐたのだつた。

橋を渡ると、水力で發電所を起してゐる製材所があり、その前を滑床の本流にそうて登つてゆくと

滑床八景であつた。その滑床八景の最初の舟石のあるところまでも、なかくの距離であつた。さすがに本流は溪谷も雄大で、水勢も激しかつたが、ゆく路に杉の植林ばかりしてゐて、風情に乏しかつた。

それが舟石のあるところへ來て、一同はすつかり惹き付けられ、松風先生、僕、春坊、乙甫、耕田の順で路から降りて、先づ岩石の上にあがつた。溪流にかまれて、飛びとびに頭を出してゐる花崗岩の岩石の上に立つて、舟の如く川岸から突出してゐる舟石を、松風、春坊の兩人がカメラに収めてから、そこでウイスキーを飲んだ。

『これはすばらしい眺めぢやなア。』

ウイスキーの一杯に、いさゝか陶然とした僕は、前に流れてゐる水を、手ですくつて喉を潤しながら云ふ。

『まつたくいゝなア。こんなところがあらうとは思ひもつかなんだよ。』

『それでは、こゝで辦當をやるか？』

『まだ早いよ。十一時十分ぢやないか。』

松風先生は、時計を見ながら僕の提案に、あつさり反對する。そこへ、乙甫君がハムの鑿を切つて出したので、先生からまづハムの一片を、喰ひ且つウイスキーを飲む。飲む程に先生は愉快になつたが、

『こゝではあんまり喰はない方がいいよ。あとで辦當が拙くなるから。』
と、一同に注意した。

やがて舟石をあとに、一行はまたも山路をとぼくと登つてゆく。かなりいつたところに、萬年橋と云ふ見るからにとつしりとした石橋があつて、その袂に記念碑が建つてゐた。就いて見ると、天保十年に宇和島からこゝまでの往還を開作せる折の記念碑であつた。しかもそれが、見事な自然石の花崗岩の一面を削つて刻みこんだものだつた。

二二、雪輪の瀧

今迄は山峽の路を登りつめてゐたのに、萬年橋を渡ると急に高原がひらけて、開墾をしたらしい跡

も見え、桃の花があちこちに咲いてゐる。そこから左手に曲つて雑木林の中を十間あまり行くと、滑床八景中の寄岩を以て知られてゐる華衣岩へ出た。これはすばらしい大石が三つに破れ、鳥居の如くになつてゐる。

春坊と僕は、その華衣岩をくゞつて河原へ出て、そこから又あかず眺めたが、自然の妙を極めた光景に唯々驚嘆するばかりだつた。これも一つに、花崗石からなつてゐたればこそ、斯くの如きものになつたと思はれない。その華衣岩の上には、見事な樹木が枝をはりひろげてゐた。乙甫君はこゝで始めてスケッチをやつてゐたが、出来上るなり僕に書き入れてくれといふ儘に、華衣岩の圖と書いてやる。やがて又高原の小徑へ出て一行は行く程もなく開墾小屋の前に出る。

『坂本、お前こゝに住んでみんか？』

『さア、悪くはないね。』

松風先生のすゝめに、僕はあつさり答へた。

『あたしはこんなところに住んで見たいですね。』

と乙甫君がしみぐとした調子で云ふ。

いつか一行はしきりに空腹をうつたへ、遂にたまりかねてパンを取り出して、噛りながら山路を歩く。但し、松風先生だけは晝飯が拙くなるからと云ふので、パンを喰はなかつた。僕はパンが斯くも美味であることを知らなかつた程にうまく、腹の虫のグウ／＼云ふ儘に半斤分をペロリと平げて了つたものだつた。

いつか高原も過ぎて、かなり峻しくなつた山路を登つてから、案内人が別の小路を六七丁ゆけば霧ヶ籠があると云ふ儘に、その方へ行つて見る。杉山のうちにある急な小路で、僕は脚の痛さをこらへて登つた。そして漸くたどり着いた霧ヶ籠は、見上げるばかりの籠で、夏なればさだめし涼しからうと思はれた。唯、籠壺の浅いのが、水量の少い事を裏書してゐるかのやうであつた。目差す雪輪の籠はそこから、まだなかくの路だつた。さすがに滑床入景の籠一だけあり、そこにいつて見ると、屋臺が組んであり、そこから眞向ふに一目の、稀に見るの景観だつた。曾て僕の十七の折に見た時よりも、唯水量の多いため、雪輪の如くなつて落下して来る水がかさばつて、いさゝか風情をそいでゐた。窃兎優美なる貌によりて名高し弘化二年金子篁陵の「游滑床記」の一節によりてその

名起りしならんか

菅 林 省

路の山手に建て、ある宇和島營林省の標札は、雪輪の籠の全貌を簡單な言葉でよく表現してゐる。この籠の右手にある落合淵は、淵底の廣さ深さが未だに知れないと云ふ。それだけに、見たばかりでも水の色が違つてゐて、一寸氣味わるい感じだつた。

「さア、こゝで辦當を喰べるから、誰か河豚の味淋乾を焼いて下さい。」

松風先生の聲と同時に、乙甫、春坊の兩君が近くの枯枝を拾ひ集め、マッチで火をつけてから河豚の味淋乾を焼く。案内人はルツク・サツクから辦當を取出し、案内人の伴は、五六間降つて下の流れから、水を汲んで来る。そこでウキスキイを取り出し、先づ一杯と先生が一同にすゝめる。

松風先生と僕の外は、一杯のウキスキイで、直に辦當を喰ひ始めた。時計を見ると、もう一時二十分になつてゐたが、僕はパンを喰つてゐるので、辦當を喰ひきれなかつた。食後にミカンを喰つてから、下の落合淵の方へ降りて見た。情けないもので廿五年も昔に見た記憶は、雪輪の籠のちよいくと水が雪輪の如く調子をとつて流れ落ちてゐる光景を憶えてゐるのみだつた。

一三、佐田岬

情けないと云へば、雪輪の漕までは吉田町からたしかに歩いて來てゐるのに、そこを通つても記憶にとどまつてゐるものがなかつた。寧ろ現滅を感じる程で、その頃は雜木ながらも官有林が路も狭くなる程密生してゐたやうに憶えてゐる。従つて、千疊敷の河原へ一行が降りたつて見た時も、僕には始めての光景だつた。

千疊敷とは少し誇張しすぎてゐたが、やはり滑床八景の一つに入るだけあり、なか／＼に捨てがたい岩石の優美さだつた。そこも過ぎると、案内人親子は元より五人の面々もかなりに疲れを賣えて來た。僕などはもう五里も六里も歩いたやうな氣がしたけれども、案内人に云はすれば、まだ松丸から三里とのこと。

いつか山路は険しくなり、それにつれて一行の足どりがのろくなつていつた。そして、遙か目下に見える鼓岩のところまでたどり着いても、誰ひとりそこまで行つて見ようと云ふものがなかつた。それは水源地に近い溪流の大きな岩石にぶつかつて、鼓の音の如き水聲を發すると云ふのだつた。

『あれ、お聞き、鼓の音がしますよ。』
と立留つてゐた乙甫君が、突然云ふ。

『氣のせいだらう。そんな音はしやせんよ。』
と、松風先生が打ちつけた。

『溪流がああ岩の下へはいりこむんだよ。たしかああ岩の下には洞があるに違ひないぜ。』
僕は鼓の音が聞こえるやうな氣もして、さう云つてみる。

やがて一行は、それを滑床八景の見おさめとして、歸路を急いだ。行けどもゆけども峠へは來ず山路は一層険しくなつていつた。漸くたどりついた營林岩の製材小屋で、猪の飼つてあるのを見てから、またもとぼくと山路を登つてゆく。樅や梅の見るからに幾百年を経た大木の、亭々と天にそびえてゐるのが、雜木の間に限りなく續いてゐる。そこも過ぎて、檜と杉の植林をしたところを五六町ゆき、又も雜木林のあるところへ出ると、梅がならう峠だつた。

峠からは、鬼ヶ城が眞向ひに聳えて見えた。がしかし、前面に梅は見えず、唯山また山で、僕は眺めからずまごつた。僕の記憶では、峠にさへ出れば海が展開し、従つて佐田ノ岬が一望のもとに眺め

られるのだつた。それは、案内人によつて、旭村を越え滑床へゆく道中で、こゝとは違ふと教えられた。

峠で一休みしてネーブルを一個づゝ喰つて元氣づいて一行は、下り路に力を得て急いで下る程に、ものゝ七八町もゆくと、一時に前面の開けて來たのに目をみはつた。そこには展望臺あり、ベンチあり前面の光景をゆつくり觀賞出来るやうになつた。そしてそこから見た光景は實に雄大で、うねうねと海中に十三里突出してゐる佐田ノ岬をバツクに嘉島、戸島、日振島から蔭淵大島あたりが、海中に浮かんでゐる。

眼下には宇和島の全市があり、特に近江帆布の宇和島工場が目立つて見え、九島から海岸線の彎曲してゐるさまが、手にとるやうである。僕は先般、飛行機に乗つて、別府の市街を俯瞰した時のことを思ひ出さずにゐられなかつた。こと程左様に、これは飛行機上より見た光景と云つてよかつた。

『いゝ景色だなア。實にすばらしいもんだなア。』

松風先生は感極まつた様子で、直に肩にしてゐた両眼鏡を取り出し、あちこちと眺め廻してから、隣りにゐた乙甫君に両眼鏡を渡した。つゞいて春坊、僕、耕田の順で両眼鏡を手にしたが、僕はこゝ

に來て始めて佐田岬に接したのが無性に嬉しかつた。二十五年も昔に見た佐田ノ岬だつたからである。

一四、宇和島

さすがに伊達侯十萬石の宇和島だけあり、鬼ヶ城を背にして前面に展開された光景のすばらしい事よ。殊に、佐田ノ岬が鬼ヶ城と相對し、その間の數知れぬ島々の海に浮んでゐる大觀は、さうざらに見出される光景ではなかつた。

そこから宇和島までは、一里廿丁とししてあつた。そこで一同は、またもその一里廿丁の山路を下つていつたのだつた。行く程に檜と杉を山路の上と下に區別して植林してゐる中へはいつた。もう廿年の上にもなるらしく、亭々とのびた檜と杉が日陰の山に鬱蒼と繁り、爲に寒さを感じるばかりだつた。

不思議にそこは陽の光がささず、冷々としてゐたにもかゝらず、谷川に水がなく、わりに乾燥し

てゐた。あるひは、杉や檜に水分を吸ひとられて了つてゐるのかも知れなかつたが、行けどもゆけどもその植林のついて絶えないのに、一同うんざりした。

漸く保命水と記してあるところへ来て、先づ松風先生が岩間から出てゐる水で胃活を飲んだ。ついで僕が、その保命水を飲んで見たが、大していゝ水とも思へなかつた。あたりには熊笹が一面に茂つてゐて、寒さはひとしほ身にしみた。そこで一同が急いで下つてゐるうちに、松風先生が先づ雲隠れをし、乙甫君がひりと先へいつて何處かへ姿をかくす。

『こいつはいけん。野糞のはきみうちになつたぞー』

僕ははすつかり疲れきつた兩脚を、交るがはるさすりながら云ふ。耕田、春坊の兩君はそれに對して、唯ニヤ／＼と笑ふばかりだつたが、兩人もかなり疲勞してゐるらしかつた。

案内人父子と、僕ら三人が立ちどまつてゐるところへ、松風先生がハンカチで手を拭きふき現れて來たので、ゆる／＼歩き出すと、乙甫君が姿をあらはした。いつもの事で、僕は松風先生を柳噓する氣にもならなかつたし、又元氣もなかつた。一時も早く宇和島へ下りたかつた。

『こりや、なか／＼えらいな。大野ヶ原の時よりずつとえらいよ。僕は滑床なんて、たはいないと

思つてゐたのに、これはえらいぞー』

松風先生は、一同を代辯してしきりにえらいと云ふ。まつたくえらい。それに、何處まで行つてもつゞいてゐる檜と杉の植林は、あまりに風情がない。しかも、そのために眼界はさへぎられ、見えるものはたゞ見事な植林で、時たま防火路があるきりだつた。

それでも、漸くにして植林を出ると、もう宇和島の市街は目の下に見えた。櫻が殆ど満開に近く、あちこちに咲いてゐるのが、市街を一際綺麗に見せてゐた。それに力を得て、一同は疲れた足に活を入れて下りていつた。そして、どうにか下りて、案内人父子とも別れて、乙甫、春坊の兩君がとなり寺へいつて見たが、車はゐなかつた。

その寺が、金剛山大隆寺で、案内人は大超寺で落ちあふと云つてゐたと云ふ。大超寺なら、僕も知つてゐたので、その方へ兩君をやつたが、やはり車はゐなかつた。それから一時間、やつさもつさと車をさがしあぐね、松風先生と僕が大超寺奥でやうやく車をさがしあてたのだつた。

案内人のへまから、一君は大超寺奥を、峠までも登つてよう會へず、あちらこちらさがし廻つたらしい。なんにしても大隆寺と大超寺の間違ひから、たうとう七時過ぎて、我等の一行は車中の人とな

つたのだつた。もう宇和島で落付いて夕飯を喰つてゐる間もなかつたのだ。
それでも吉田町の菓子屋でパンを仕入れ、月夜の法華津峠にさしかゝる頃には、どうにか腹もくち
くなり、ウキスキーの一杯で、大分元氣になつた。その上、卯之町へ来て、とあるうどん屋で、鍋焼
うどんを一杯喰つてすつかり元氣をとり戻した。こゝからはもう昨日やつた逆コースで、三瓶へ着い
たのが九時半であつた。(五月一日、八幡濱毎夕)

昭和十五年二月十五日印刷
昭和十五年二月二十日發行

【非賣品】

著者 坂本石創
愛媛縣西宇和郡三瓶町字朝立壹番耕地二九六

印刷人 川尻茂平
愛媛縣八幡濱市一五一〇

發行所 八幡濱毎夕新聞社

終

